

報

道写真家のピーター・メンツ
エルが編集した『地球家族』と

世界30か国のふつうの暮らし」という写真集が好きだ。これは世界30カ国の、平均的な暮らしをしている家族の家を訪ねて、その家の中にある物をすべて家の前に出して撮影するという企画によってできあがった写真集である。

取り上げられている国々は、アジア、ヨーロッパ、中東、アフリカ、アメリカと五大陸のさまざまな国々に及ぶ。家の中にある物も、文化やお国柄を反映して

いて面白い。例えば、西アフリカのマリの一家（11人暮らし）の持ち物は、その多くを調理器具が占めている。ふたつ割りにしたひょうたんや鍋、つぼ、ひしゃく。そのほかに農具や魚網や蚊帳、自転車。衣服は着ているもののほか、

夫妻それぞれに2組だけ。すべての生活物資を集めても、4畳半ほどのスペースに余裕を持って並べられるくらいしかない。

これが先進国になると、俄然物が多くなる。ドイツの4人家族の場合、本棚、オーディオセット、ダイニングセット、自動車、バイク、ベッド、食器棚、家具やソファ、洗濯機、調

旅の曲者

45

段ボール

文・写真／田中真知
Tanaka Mochi

イラスト／bozen

理器具、机など、トラック何台分の量にふくれあがる。アメリカのテキサスの3人家族だと、さらに車が3台、家具やベッドやピアノの他、木工用の電動工具、シヨットガン、釣り道具など、趣味の品々も大幅に加わる。とはいえ、家が大きいの、これだけのものが詰まっていたとしても、それほど手狭には思われない。物が少ないのはプータンである。

10人以上の大家族で暮らしているにもかかわらず、個人の持ち物というのがほとんどない。家にある物の中心は、農機具と仏具、それに調理器具である。同じくモンゴルの遊牧民も、家にある物は多くない。移動式のテントであるゲルの中にあるのは、2つのベッドと食器棚とタンス、最近ではテレビや電気ポットなども入っているようだが、それでも移動する生活にふさわしく、よけいなものはいっさいないという印象を受ける。

それと対照的に悲惨としかいようがないのが、日本である。写真集に登場するのは、平均的な建て売り

住宅に暮らすウキタさん一家（4人家族）。そこに並べられた品々は家の大きさと是不釣り合なまでに多い。しかも、ひとつひとつの物が、ウキタさんには申し訳ないが、どれもこれも安っぽいのだ。風呂場に置いたためのプラスチック製のコーナー台、100円シヨップにありそうな種々の容器、子供部屋のカラーボックス、電子ピアノなど、省スペースで安価な品々が、これでもかというほど詰め込まれている。日本の家の狭さと比べて、この物の多さはいび

つに見える。とはいえ、日本の平均的サラリーマンの家庭など似たようなものだろう。

この写真集は、「物を持っていくことが本当に幸せなのか」という問いに貫かれていく。だからといって、物の多さなどより、心の豊かさが大切なのだ。むしろ、過剰な物とは心の中にある幻想や不安の現れだと思ふからである。ある人は鏡を持つことで自分に自信を持てる。ある人は絵を所有し飾ることによって、自

分の芸術的関心が満たされたと感じる。実際の自分は何ひとつ変わっていないのに、物を持つことによって、人は変わったという可能性を手に入れられるのである。

この「可能性」というのがポイントなのだと思う。例えば、最近のパソコンには様々な機能がついていて、そのすべてを使いこなしている人など、実はほとんどいない。にもかかわらず、人が高機能のパソコンを選ぶのは、このパソコンがあれば、こんなこともあんなこともできるという可能性を手に入れられるからである。実際には、そんな機能は使わないことをわかっていても、その可能性を所有することが豊かさの感覚につながる。現実にはなくても、まったくかまわないのだけれど、持つことによって手に入れられる可能性の感覚。実はいまの日本の物の過剰さというのは、この可能性への欲望に貫かれていく気がする。

逆にいうと、こうした可能性にかまれていないと、人は不安でならないのかもしれない。あたかも、様々な保険に加入するように、多くの物で身の回りを満たしておかないと生きていく心地がしない。身の回りにあふれる、おびただしい物の数々はそんな不安が物質化したものだともいえる。そう考えると、いま





この原稿を書いている机の周りに積み重ねられたおびただしい本やらコンピュータやらCDやらも、生活を満たしているどころか、逆に脅かし

ているようにすら思えてきてしまう。はたして、いま持っているCDのうち、もう一度じっくり聞き直すものが何枚あるだろう。残された人

物を持たない暮らしの究極的な実践者といえば、修道士かもしれない。生きるという営みを極限までシンプルにした彼らの暮らしは、私たちとは対極にある。

生の中で、もう一度ゆっくり読み直したい本が何冊あるだろう。持っているだけで二度と開くこともないであろう本は相当数にのぼる。こまめに録画した映画のビデオやDVDにしても、実際には時間がなくてろくに観ていないではないか。ただ、それらを整理したくても、なかなかそのきっかけがつかめない。

そんなとき、いつも思い出すのは数年前、友人宅のパーティーで会った、ある元デザイナーの話だ。

初めて会ったとき、彼は造形作家の奥さんといっしょに、都会の一角に自分で設計した斬新なデザインの家を建てているところだった。ところが、その1年後に会ったとき、彼は奥さんと離婚したという。それだけならよくある話だが、彼は仕事をいっさいやめて、使っていたコンピュータや機材もすべて売り払い、事務所も完全にたたんでしまったという。

これからどうするのかと聞く。「歩く旅に出ます」と言うのだった。東京から西に向かつて歩き始めて、

海に出たら、そこから船に乗って中国へ渡る。その後もひたすら西へと歩き続ける、何年になるかわからないけど、終わりを設けるつもりはない。

彼はそれまで旅行などほとんどしたことない人だったが、冗談で言っているのではなさそうだった。荷物はどうするのかと聞くと、これまでたまっていた荷物は縦横高さの合計が160センチの段ボール箱ひとつにまとめて1カ月10000円のトラッキングに預けたという。でも、段ボール箱ひとつじゃ、収まらなかったでしょうと聞くと、そこに入らなかったものは服だろうが、作品だろうが、全部捨てたという。わずかにひとつだけの段ボールに入るものが、彼の思い出の品の全てなのだ。

それ以上、彼は何も言わなかったし、ほくも聞かなかった。彼に本当になががあったのかはわからないが、思わず大きく息を吸いこんでしまった話だった。彼は、いまも歩いて旅を続けているのだろうか。



田中真知

たなか まち

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に「アフリカ旅物語（北東部編・中南部編）（凱風社）」、「ある夜、ピラミッドで」（旅行人）、「訳書にグラハム・ハンコック」（神の刻印）（凱風社）、「惑星の暗号」（翔泳社）など。